

大阪西成地域（通称、釜ヶ崎）と NPO法人“釜ヶ崎支援機構”について

飯田 謙一

1、はじめに

2017年度社会科学研究所の春季実態調査が、2018年2月28日から3月3日までの4日間にわたって実施された。此度の調査は大阪の産業や行政の実態調査が目的で実施されている調査の一環として、大阪市内と大阪府泉佐野市ならびに池田市において実施された。大阪市内では西成市役所や通称釜ヶ崎と呼ばれる西成愛隣地区、また大阪南部に位置する泉佐野市では、市の主要産業で我が国のタオル生産の発生地であり、我が国タオルの最大生産地として有名な泉州タオルの生産地を訪れ、最大手の生産者であるツバメタオル株式会社を訪問、泉州タオルの特性に関して詳細な説明を受けた後、実際に稼働中の製織現場を見学することができた。また泉州タオルの生産の特徴は後晒であるが、その糊付け作業の大手加工業者のダイワタオル社では、染色工場稼働中の生産活動現場を見学することができた。そのあと日本一を誇る泉州タオル生産地の各種製品の展示所で、泉州タオルの現状に関する説明を受けた。調査最終日、池田市のダイハツ工業を訪れた。今回の実態調査でも今日の大阪を支える一部の産業や、大都市大阪のある地域における人々の実態について知るうえで、その一部ではあったが地域や産業の拠点などを訪問でき、それらの地域に関する大変有意義な知識やその実態を知ることが出来た。この度も大都市大阪の一部ではあるが、大阪をより知るうえで有意義な調査に参加出来たと考えている。

この度の調査合宿でも、上に述べた生産地で複数の企業の作業現場を直接見学する機会があり、各訪問先では大変懇切な説明を受けることが出来た。さらに各企業の生産現場では具体的に製品がどのようにして生産されているのか、製品の生産にどのような特殊技術が採用され活用されているのかなどに関しても、詳細な説明を受けることが出来た。また生産地では日々単に製品を生産するだけでなく、より優れた製品を生み出すための努力を日々続けていることを、生産現場で直接聞くことが出来、またその現場を直接目の当たりにすることも出来た。各企業がより優れた製品を日々生み出す努力をしていることを具体的に知り、著名な生産地ではすぐれた製品をうみだすために、日々努力を重ねている姿を目の当たりにすることが出来た。また各企業が日夜積み重ねている努力に関しても、生産現場を直接訪れ見聞することによって、優れた製品の多くが生産されていることを知ることも出来た。本来ならば此度訪れた各企業で、

見聞することが出来た事柄のすべてに関して、筆者が理解できた事柄をすべて記述、紹介したいと考えているが、記述スペースが限られているので別に機会に紹介することにして、小論ではこの度の実態調査の初日と最終日に訪問した、大阪の釜ヶ崎として全国に知れ渡っている、大阪西成区を訪問してその実情について詳細な説明を受け、その後でその地域を見学した折に貴重な体験をすることが出来たので、その事柄だけに限定して、筆者がそこで体験しながら考えた様々な事柄に関してのみ、執筆可能な範囲で記述することにした。

此度の実態調査では最終日に、我々は大阪西成区の、通称釜ヶ崎地域を訪問して、釜ヶ崎の町再生フォーラム事務局長＝ありむら潜氏の案内で、様々な施設や住人の生活実態などに関して、詳しい説明を受けながら見学をする機会を持つことが出来た。また貴重な体験をしながら、その地域の詳しい情報も得ることが出来た。^{注1)}

2 西成地域の人々の生活と各種の施設見学

此度の調査の最終日の午後、我々は大阪西成に所在する、ありむら潜氏^{注2)}の事務所を訪問して、ありむら氏から、これから訪れる釜ヶ崎地域に関して、この土地の歴史から始まって、釜ヶ崎を全国に知ら占めることになった、1968年からの度重なる暴動事件や^{注3)}この地域の現在までの歴史、さらに今日この地域がどのような状態に変容しつつあるのか、その歴史、ならびに釜ヶ崎を特徴づける様々な事柄、そして今日の状況について等々、詳細な資料や OHP を活用した解説で、現地に関する様々な予備知識を獲る学習をした。また氏が今日行っている様々な活動、さらに今後目指している各種の活動などに関しても詳しい説明を受けた。それらの内容に関しては、氏が懇切な紹介をしながら我々を案内してくれた場所と関連させながら、小論で徐々に紹介する事柄と関連させて、それらのことを紹介しながら明らかにしていく事にした。

ありむら氏の事務所における懇切で詳細な説明を受けた後、我々は氏の案内で、日々その地域で繰り返し行われている、住人たちの生活実態の現場を見学して歩いた。はじめに訪れた場所は、多くの釜ヶ崎の住人にとって必要不可欠、そして彼らの大多数の者が日々係わりあっている公益財団法人西成労働福祉センター（あいりん労働公共職業安定所）を訪れた。当日はいにく午後に現場を訪れたために、実際の職業紹介や彼らの求職活動を直接眼にする事ができなかったが、職業紹介所の窓口を見学した。この地域の住人にとって最も大切な場所である職業紹介所の活動実態に関しては、ありむら氏の詳しい紹介と写真などを使用しての説明により、その機能やこの職業紹介所が果たしている実態などをかなり理解することが出来た。

西成労働福祉センターでは日曜、休日以外の毎日、センターに登録した労働者に、当日必要

とされる求人数に応じて、当日登録をした労働者に仕事を斡旋する。しかし当日紹介を受けることが出来なかった労働者には、当日臨時求人がある場合には仕事を紹介したりする。また当日だけ必要とする数の労働者を日雇いで採用する事業所が、職業紹介所周辺で車などを使用して求人活動を行うとか、労働者と相対で仕事を紹介する業者などが必要な数の労働者を求めて、求人活動を活発に行っている。労働者の中には当日希望しても登録順番により仕事を得られない者もいる。また 65 歳以上の高齢者には求人が少ないか無いために、センターでは高齢者特別清掃仕事を、連日輪番紹介という形で、清掃作業をある程度の人数の労働者に紹介するとか、センターのガードマンの仕事を、その数は多くはないが紹介している。それでも紹介にあぶれる労働者が出るために、なるべく労働者が仕事に就ける機会が増えるように、この西成労働福祉センターの建物の 2 階には、彼らになるべく仕事を得やすくなるような技術を習得させるための技能講習受講相談や、労働相談、労災相談、生活その他の相談所などがある。また尋ね人の紹介や、生活その他の相談など、様々なサポートを行う相談所が設けられている。

西成労働福祉センターを見学した後、西成の路上で地域に居住する人々の日常生活を観察したり、近くの公園でボランティアの青年と、サッカーを興じる子供たちの姿を見学したりした。また、ありむら氏に親しく声をかけてくる住人の話を聞いたり、住人や町の日常の様子を見学しながら、ありむら氏から住人たちの日々の生活に関する説明を受けた。その後我々は、西成労働福祉センターと道路を挟み、反対側の「あいりん シェルター（無料休憩所、禁酒の館）」という看板のかかったプレハブの施設に案内され、その施設内部を見学した。この施設は NPO 法人“釜ヶ崎支援機構”が運営している施設で、この施設の主な目的は、西成労働福祉センターで、その日に仕事の紹介を受けることができなかった労働者や無職の者で、その殆どの人がその日簡易宿泊施設に宿泊する資金がなく、夜間路上などで野宿して過ごすしかない者の中で、数に制限があるが当日宿泊の申し込みの順番を取り、手続きをした者にパイプ製の簡易二段ベッドが用意されており、そこに宿泊できる施設で、夕刻より翌日の早朝 5 時まで寝所と簡単な食料を提供して、野宿から彼らを守るために開設している施設を訪れた。^{注4)} 彼らは仕事にあぶれると、その日は路上生活を余儀なくされるので、この西成労働福祉センターの近くには、これらの労働者を路上生活させないための救済手段として、利用者の人数は限られるが宿泊や休息できる設備が準備されている。

その施設を訪れると、宿泊用の部屋の内部は驚くほど清潔に保たれ、また身体を清潔に保つためのシャワーやトイレ、それにゆっくり休息ができるスペースや談話室が用意されており、その上、自由に読書することが可能な図書室が設置されている福祉施設である。施設内は当然のことながら禁酒・禁煙で、静かに利用することが条件となっている。

筆者がその施設内で強く印象づけられたことは、ありむら氏の説明で、海外から訪れる見学

者も一様に驚きの感想を漏らすとのことであるが、30 畳余ほどの図書室があり、各種書籍がかなり備えられ、利用希望者は無料で好きな蔵書を借りることが出来るので、図書室で静かに読書をしてきたことである。訪れた当日戸外はかなり寒かったこともあり、この図書スペースは満席であった。ありむら氏の説明ではこの施設の利用者は、外部の一般の人々より読書を好む傾向があるとのことである。

ありむら氏によると、現在もこのような施設は十分でなく、路上で生活せざるを得ない労働者が、かなりの数いるとのことであった。

この施設を見学した後、我々はこの施設近くの、“おはな”という名称の簡易宿泊所を経営する経営者の計らいで、その内部を見学する機会を得た。この宿泊所で宿泊者の居室を見学したが、各室は3畳ほどのスペースがあり、室内には白いシーツに包まれた清潔な寝具が敷かれ、その部屋の内部にはテレビや冷蔵庫が設置されていた。見るからに快適な宿泊をすることができると考えられる居住スペースであった。この簡易宿泊所の全室は同じような仕様であり、また居室の外部には各階に簡易炊事場所が設置され、自由に使用することが可能となっていた。この施設では入浴や洗濯も自由に出来るようになっており、居住者の身なりも清潔であった。さらにこの設備では各階に談話スペースが設置されており、居住者が自由に雑談するために使用できるとのことであった。またこの簡易宿泊所の玄関には、宿泊者の世話や必要なときサポートをする事務所があり、手助けをする若者が常にそこに詰めていて、必要な場合、宿泊者の支援を行っているとのことであった。訪れた当日、サポートに当たる若者達が、宿泊者に明るく声掛けをするなど、宿泊者の要望に気軽に対応をしていた。

ありむら氏の説明では、近年この種の簡易宿泊所が“おはな”の他にも数軒あり、同じような簡易宿泊所が徐々に増えていて、“おはな”と同様のサービスを行っている宿舎もあるとのことであった。

我々が訪れた簡易宿泊所“おはな”の経営者は、簡易宿泊所を利用する宿泊者に対して大変理解があり、日常の生活の相談とか宿泊者が入院した場合など、必要とされる様々な手続きや支援を積極的に行っており、同氏は西成地域の町会長を務めるなど、ありむら氏の様々な活動に理解を示し、常に協力を惜しむことなく積極的に様々な支援をされる篤志家であることを知った。

“おはな”では内部の見学を終了した後、経営者と3名の宿泊者との懇談をすることができた。3名の方から彼らの過去の経歴、西成に定住することになった経緯、また現在西成の日々の生活などに関しての話を聞くことが出来た。3名の方の過去は様々であったが、現在の西成での日々の生活に様に満足しており、今後も現在の生活状態を続け、西成を出て外部で生活する気持ちは全くないとのことであった。そこには同じような環境の隣人を愛し、ともに支え

あって生きて行きたいとの気持ちが強くあふれ出ていた。このことに関しては、小論では詳しく記述することが出来ないが、後日機会があったら是非、詳細な執筆をしたいと考えている。

現在、簡易宿泊所で生活している人たちの話を聞くことが出来、その人たちの現在や今後のことについて話を聴くことが出来た。ありむら氏は西成、愛隣地区などで生活を送る人たちにに関して、彼らがどのようにして西成愛隣地区に住み着くようになったのか。また西成愛隣地区に住む人々の考え方や行動の特性と、彼らはどのようにして日々生活を送っているのか。また彼らの近年の生活環境がどのように変化しているのかなどに関して、以下のように分析しながら、今後の環境の変化（生活保護に依存して生活する体質）に対して、ありむら氏や様々な形態で彼らを支えている人々が、それらに対してどのように対応し、道を切り拓いていくべきなのかに関して述べておられる。これらの一部に関して以下簡単に紹介をしてみたい。

はじめに、ありむら氏は現在西成愛隣地域で生活を送る人々が、どのようにして愛隣地区に居住することになるのか、そのことに関して彼らの殆どが人生の終着駅として、無縁状態で西成地区にやってくる。彼らは特有の生活意識を共有しているといえる。すなわち孤立と絶望の感覚を持ち、極度な無縁状態で、非定住性意識を持ち、その日暮らし意識が強く、当然なことながら住民意識が希薄など特有の生活意識をもっている。金銭管理ができず日々酒におぼれ野宿しながら、目的もなく生きているというのが特徴である。さらに、彼らの特徴は単身者男性で、日雇い建設労働者が多く、住居は簡易宿泊所が主である。さらに彼らの特徴は特有の熟練度と労働観を持っているが、責任感が希薄で、住民登録はせず、問題が起こると遁走してしまうという特性を持っている。またその日暮らしで宵越しの金を持たない。酒におぼれて野宿をするなどの、不規則な生活と刹那的な生き方をしているために、結核などの病に侵されることが多い。反面利那の縁で友人ができると、とことん面倒を見るなどの情にもろい感覚を持ち合わせている。家族縁者との関係がほとんどなく、そのような考え方をあえて持たずに、天涯孤独でその日暮らしの生活をする者が多く、一種の自暴自棄的な生活価値態度をとっている者が多いと分析している。^{注5)}

ところで、西成地域には住人を支える、様々な活動が行われているのが、そのことに関しては、後日改めて紹介する機会を持つことにしたい。本稿ではその代表的ともいえる組織で、最も中心的存在で影響力を持っているといわれている、“NPO 釜ヶ崎支援機構”の主な活動に関して、簡単に紹介をしたい。

3 NPO 釜ヶ崎支援機構について

この西成地域に関しては、府や市などの必要な政策が実行されているが、その他に、様々な

NPO 団体をはじめ、キリスト教や仏教団体、それに NGO や、地域の公園において、路上生活者や生活困窮者に炊き出し活動を行っている組織、それに地域の学童や幼児に対して、学習指導やサッカーを始め様々なゲームなどをして、活動を継続している学生ボランティア団体など、まさに多種多様な団体や組織が存在しており、住人にとって必要とされる活動を長年にわたって行っている。これら諸団体の活動は、いずれも西成地域に居住する住民にとって、必要不可欠なものである。

ここでこれら全ての活動団体の活動や、組織自体に関して詳細に紹介する事は不可能であるので、その中から代表的な支援団体の例として、“NPO 法人釜ヶ崎支援機構”に関して同組織の案内書の紹介文から、その一部を紹介することにしたい。

“NPO 釜ヶ崎支援機構”は釜ヶ崎の現状を踏まえ、野宿生活者と野宿に至る恐れのある人々の社会的処遇の改善や、その自立支援が図られるような地域の形成に関する事業を行うことにより、社会福祉の向上を図ることを目的に活動する団体である

私たちは、就労機会拡大と居住；生活の安定により、野宿生活をなくしても良い社会の形成を目指しています。具体的に、a) ホームレスの予防。b) ホームレス状態からの脱却。c) 再ホームレス化の防止を支えるために、制度の隙間を埋める多様な支援事業を展開しています。

就労支援と福祉援護の垣根を越える総合支援を目指します。官民協働のセフティネットワークで、ソーシャルインクルージョンの実現を目指します。

この支援機構は理事長、副理事長、理事、監事の 10 名の役員がおり、各分野から選出された理事が中心となってこの活動を行っている。

釜ヶ崎支援機構の活動は大阪西成区に居住し、日雇い労働市場である愛隣総合センターを中心に存在する簡易宿泊所に宿泊し、その周辺の食堂や飲み屋を頼りに生活する日雇い労働者や、高齢で一般の日雇い労働につけず、愛隣地域内外の清掃や除草、補修作業などに従事する高齢労働者、それに仕事に就けず路上で野宿せざるを得ない状態に追い込まれている人たちなど、様々な支援を必要としている人々の救済や要望に応えるために、多岐にわたり様々な活動を日々継続的に行っている組織である。

そのために様々な支援活動を広範囲にわたって支援活動を行っている。その中でも主な活動は基礎的支援事業分野の活動としては、上に述べた高齢者特別清掃事業（社会的就労事業の他に、同じく基礎的支援事業として、野宿を余儀なくされた人々に対する夜間宿泊所を提供する宿泊運営事業（シェルター）、昼間の休憩や交流の場所として、また就労生活支援のために、「禁酒の館」の名称で、食事付き相談会、喫茶室、図書館、無料シャワーや洗濯機の利用ができる場所の提供などの活動を日々行っている。そのほかに訓練と就労準備分野としては、地域密着型就労自立支援事業、内職作業提供事業。また社会的企業分野として公園管理共同事業。自転

車リサイクルシステム構築事業。その他民間企業や社会福祉法人などから請負や委託を受けた就労機会の提供。そのほか相談支援事業として野宿生活者からの相談を受け、その転換を図れるようにする事業や医療、債務、年金、生活保護の相談と支援。生活改善、健康相談事業。就労相談、就職支援。さらには西成地区単身高齢者生活保護受給者の社会的つながり事業など、支援が可能な様々な分野の活動を行って、西成地区の住人の様々な支援活動を日々実施している。

この活動は特定非営利活動法人として、北と南（仕事支援部）の両事務所。“あいりんシェルター”。日雇い労働者就労支援センター（禁酒の館）相談支援事業部、リサイクルプラザ、チャリティエイ自転車プラザポリタン、ひと花センターなど様々な活動を効率的、かつ有機的に活動を行っている。

そしてNPO法人 釜ヶ崎支援機構は、様々な私的、公的機関と多様な協力関係をもって維持されている。財政的には公的支援や多くの人や企業などからの寄付金により運営されているが、篤志家や関心を持つ一般の人々からも寄付の振り込みを受け付けており、その財政を賄って運営されている。

この釜ヶ崎支援機構への入会は、正会員は年会費が5,000円、賛助会員は3,000円となっており、年会費は毎年7月1日から翌年の6月30日各年間単位で納める方式をとっている。

ところでこの支援機構にはすでに紹介した、ウエルフェアマンション“おはな”の他に、機構の活動に賛同協力する簡易宿泊施設があり、その数が近年増加しているとのことである。これらの簡易宿泊所の他に現在では、外国人旅行者や安価な宿泊施設を利用する人々がこの地域でも多くなり、安く宿泊できる宿泊施設が増加しているとの事である。

NPO法人釜ヶ崎支援機構には多くの簡易宿泊所が提携をしており、そしてほとんどの場合、路上生活者や野宿をする労働者をなくすためのサポートを積極的に行っている。これらの簡易宿泊所に入居するには、殆どの場合、NPOなどの地域諸団体の紹介で入居が決まるといわれている。この他に支援機構は、入居時のサポート、面接、聞き取り、個人ファイルの作成、住所設定の手伝い、IDカードの発行、家具日用品の購入、保護費振り込み用口座の開設、生活保護申請の手伝いなど様々な支援を積極的に行い、野宿や路上生活者を少なくする活動を、日々積極的に行っているとのことである。

以上、主にありむら氏から紹介された事柄や、その活動の中心となっている西成地域を速足で眺めた筆者の感想に関して簡単に執筆したが、最後に、最近の西成地域の動きに関して触れることにしたい。

4 近年の西成愛隣地域の変化について

記述は前後するが、我々は此度の実態調査の初日の3月1日、最初に大阪西成区の区役所を訪問して、西成区長の横関稔氏から最近の西成地域に関して、この地域が様々な要因から、最近大きく変容している事と、市が西成区の住人の量的、質的など様々な変化にどのような対策や計画を講じて、これらの種々な変化する事項に対して具体的に対応しているかなどに関して、様々な事例の紹介を受けながら、この西成地区に関する基礎的な知識を得た。

すべての事柄に関し小論では紹介できないが、その一部を取り上げてみると、この西成地域の住人に生じている変化としては、

- a) 西成地域の労働者の主な仕事は、日雇いで建設現場や工事現場での作業であるが、経済環境の変化により、彼らの主要な産業の建設業界の仕事が大阪周辺でかなり減少しており、彼らのような日雇い労働者を大量に必要としなくなったために、仕事の量が著しく減少している。
- b) 西成地区の労働者が高齢化、減少する一方、新規の若手労働者の参入が少なく、需要に対応することが出来ない。また我が国では少子高齢化が急速に進み、労働人口が急速に減少しているが、中でも若年労働者の減少が顕著である。さら若年労働者は危険、汚いなどの作業現場を嫌う。そのために若年労働者が西成地域に以前のように入ってこない。
- c) 西成地域の住人の特徴は、単身、男子労働者が殆どで、家族持ちが極度に少ないために、人口増が限られるので、若手の労働者の供給が極度に少ない。
- d) 近年、社会福祉制度が充実して、生活保護が以前と比較して受給しやすくなり、住人が積極的に生活保護を受給するようになってきた。
- e) 生活保護受給者たちが、西成地域から他の地域へ転出していくことが多くなってきた。
- f) 以前路上生活者たちはそのような状態になると、東京の山谷とか横浜の寿町、大阪の釜ヶ崎（西成）に居住拠点を求めて移動してきたが、今日では東京や大阪などの大都会の地下街やビルの軒先、公園など野宿する場所が多くあり、食料も飲食店などの残飯が豊富にあるので、そのような都会での生活が容易になっており、山谷や釜ヶ崎に流れ込まなくても、生活することが可能となってきた等々の環境条件が著しく変化してきた。これら様々な要因により、西成（釜ヶ崎）地域にあえて居住しなくても、生活することが可能となってきた。これら様々な要因が、西成地域に大きな変化をもたらしてきていると考えられるとのことであった。これらの動きに対して、行政側の西成市役所でも“西成特区構想として、西成区の抱える諸課題として、少子高齢化、不法投棄、迷惑駐輪、治安、結核そして野宿生活者などが主な問題であると位置づけ、これらの問題に対して、積極的に対応すべ

きであるとして、これらの課題の具体的な解決には「まちの活性化・イメージアップ」「若者や子育て世帯の流入促進」が必要であると位置づけ、「西成が変われば大阪が変わる」、西成区を変えることが大阪市の活性化につながるとの考えを打ち出して、住民の協力を得ながら、このことに積極的に取り組んでいくとの姿勢を示している。筆者もこの考え方が重要であると考え。

5 結び

この度の調査に参加して、大阪の各地域で大阪府の産業を力強く支えている企業を訪れ、その実態を知る機会を持つことが出来て、大変有意義であったと考えている。末筆ながらお世話になった企業の皆さんに、衷心より感謝を申し述べたいと思います。また特に通常では、個人で自由に訪れ、調査することが不可能と考えられる西成地域（釜ヶ崎）で、その地域の人々の生活になくはならない西成労働福祉センター、路上生活者を救済するための“あいりんシェルター（無料休憩所、禁酒の館）”、西成地域の多数の住人が住居としている簡易宿泊所などを見学できたことは僥倖であった。この貴重な体験ができたのは、長年にわたり日々その地域の住人の生活全般を支える活動を行っている、NPO 法人釜ヶ崎支援機構のありむら潜氏の協力と案内があったからである。短時間ではあったが、釜ヶ崎の住人の実態を垣間見ることができた。また大阪西成区役所では、西成地区（釜ヶ崎）の最近の住民の変化と動向などに関して、大きく変わりゆく生活実態や、この地域の動きなどに関して詳しい説明を受け、この地域が急激に変化している実情を把握することができた。そして特にこの地域における変動の主要因である高齢化と少子化の問題と、働く職場が急速に縮小していること。また住民が高齢化と就業機会の減少から、生活保護に依存して生活を維持しているのが、現在の状態である事を知った。今日、西成地域（釜ヶ崎）の居住者の生活基盤も時代と共に、大きく変容を遂げようとしている。またこの地域の象徴ともいえる西成労働福祉センター（あいりん労働公共職業安定所）も、数年以内に健康管理センターや、住宅など様々な新しい機能を備えた建物がこの近くに建設されることになっており、その場所への移転が決まっているとの事である。新しいセンターが完成すると、この地域で生活する人々の生活形態も、大きく変化すると考えられる。ありむら氏や“NPO 法人 釜ヶ崎支援機構”や他のボランティア活動も、新しい時代の動きに合わせて変化をしていく事と考えられる。

小論では執筆できなかった多くの事柄に関しては、後日改めて筆を執る機会を持ちたいと心から願っている。

注

- 注 1) 我々は調査初日、大阪西成市役所を訪問して区長横関稔氏から、大阪西成の現状に関して詳細な説明を受けた、そのことに関しては後の章で説明することにした。
- 注 2) ありむら潜氏は大学卒業後今日まで、42年にわたり西成地域（釜ヶ崎）の住人を支援する様々な活動をしている篤志家ともいえる活動家で、釜ヶ崎地域の住人にとって欠かすことのできない存在で、今日も住人が日々必要とする、様々な活動をその中心となって日夜活発に活動をしている中心人物で、釜ヶ崎地域のすべての住人が必要としている活動家である。氏は有名なマンガ家でもあり、著作物も多数刊行されている。
- 注 3) 1961年以降延べ24回に及んだ。
- 注 4) 福祉センターでは日々この労働センターに登録して仕事を求める人々にとって、景気に左右されることが多く、特に近年不況の影響で求人数が減少しているために、仕事を得ることが出来ない労働者もかなりの数いるとのことである。
- 注 5) ありむら氏のこの分析は、氏が40余年にわたり、観察体験した事柄であり、実に詳細な観察と分析をしていると筆者は考える。

参考文献

NPO サポートイブハウス連絡協議会 リーフレット

NPO 釜ヶ崎支援機構 リーフレット

愛りん地域 まちづくり会議関連資料

釜ヶ崎の特有性を考える リーフレット

ありむら潜 “ホームレスから日本を見れば 福祉の広場” 2015-2016.

西成市役所 “西成特区構想について” 平成30年3月1日